

京大広報

No. 468

京都大学広報委員会



完成した木質科学研究所実験棟 ー関連記事本文791ページー

目次

<大学の動き>

施設整備の概要.....791

キャンパスを美しくしよう

総長 井村裕夫.....791

排出水の水質規制の強化.....792

<部局の動き>

平成6年文学部博物館春季公開展示.....793

公開講座 文学部博物館

「日本都市圏への招待」.....793

<紹介>

医学部附属病院

新診療施設棟における放射線診療.....793

訃報.....795

<コラム>

「作品としての自然科学」

長岡洋介.....797

<大学の動き>

施 設 整 備 の 概 要

本学関係の国立学校施設整備事業（『京大広報』No.453, No.460及びNo.465参照）として、現在、構内の多くの箇所で施設の新築、改修等が行われている。

このうち、既に完成した主なものは、理学部動・植物学科及び医学部校舎の第Ⅰ期工事、工学部機械工学科等、木質科学研究所及び放射線生物研究センターの各研究・実験棟、アフリカ地域研究センター等共同研究棟などの建物のほか、総合体育館床面等改修、事務局周辺環境整備等があり、工事中のものとしては、文学部等校舎をはじめ、理学部動・植物学科及び医学部（各第Ⅱ期工事）、農学部農芸化学科等、人間・環境学研究科の各校舎、工学部、防災研究所、基礎物理学研究所、ウイルス研究所、霊長類研究所、生体医療工学研究センターの各実験・研究棟、また、西部食堂、事務局本館の各改修、北部グラウンドの屋外照明設置・器具庫新営等がある。

さらに、今後予定されているものに、北部及び総合人間学部のグラウンド、並びに総合体育館付設プールの各改修等がある。

キャンパスを美しくしよう

京都大学総長に就任してキャンパスを見て廻ったとき、施設の老朽化、狭隘化とともにそれが大変汚いことに衝撃を受けました。大学の教育・研究機能が円滑に営まれるためには、若々しい雰囲気とともに、他方では静謐な環境が必要であります。そこで過去2年間、環境の整備にささやかではありますが努力を致しました。駐車規制を行ったのも構内における安全の確保が第一の目的であります。同時に落ち着いた環境を作りたいと考えたからでもあります。また体育館、グラウンド、食堂などの改修にも意を用いました。残念ながら汚いことで有名になっている京都大学の環境を少しでも改善するべく、今後も努力を続けていくつもりであります。

最近、整備を行ったばかりの施設にペンキを塗られたことは、大変残念なことであります。知性の片鱗すら感じられない落書きを見て、私は怒りを通り越して深い絶望を感じました。このような行為は何と強弁しようとも、絶対許されぬことであります。私は京都大学の伝統である自由を誇りに思い尊重しなければならないと考えています。しかし自由は、責任と他者の自由に対する共感を伴ってこそ、はじめてその本来の理念を発揮するものであります。近年国立大学の老朽化、環境の悪化に対する国民一般の認識と憂慮が深まり、京都大学としても鋭意改善の努力をしているところでありますが、それを無にするような行為は厳に慎まなければなりません。国立大学は国民の税金によって運営されているわけでありますので、国民の目が厳しくみつめていることに思いを致して、深く反省してほしいと願っています。

平成5年度は補正予算もあって老朽化した建物の改築、改修が始まりました。現在の財政事情は大変厳しいものがありますが、今後とも施設整備の必要性和その早期実現を強く訴えていくつもりであります。そのためにも自らがキャンパスを少しでも美しくしていく必要があります。構成員の皆さんの御協力をお願い致します。

総長 井 村 裕 夫

排水水の水質規制の強化

環境保全委員会

排水基準を定める総理府令が一部改正されたことにともない、本学の各キャンパスからの排水に対する水質基準も下記のように一部強化されるとともに、有機塩素化合物や農薬など13の物質が新たに規制項目に追加され、基準が定められましたのでお知らせします。

この新基準の適用は本部地区は平成6年8月1日より、その他（宇治、犬山、熊取など）の地区は平成7年2月1日からです。

本学で化学薬品等を使用される人は、その薬品の管理並びに実験廃液の回収に、より一層の注意と努力をお願いいたします。

表1 規制強化された物質と基準値

物 質 名	新基準値 mg/ℓ	旧基準値 mg/ℓ	備 考
鉛 及 び そ の 化 合 物	0.1	1	
砒 素 及 び そ の 化 合 物	0.1	0.5	

表2 水質基準に新たに追加された物質と基準値

物 質 名	新基準値 mg/ℓ	備 考
ジ ク ロ ロ メ タ ン	0.2	有機溶剤
四 塩 化 炭 素	0.02	〃
1,2-ジ ク ロ ロ エ タ ン	0.04	〃
1,1-ジ ク ロ ロ エ チ レ ン	0.2	〃
シス-1,2-ジ ク ロ ロ エ チ レ ン	0.4	〃
1,1,1-ト リ ク ロ ロ エ タ ン	3	〃
1,1,2-ト リ ク ロ ロ エ タ ン	0.06	〃
1,3-ジ ク ロ ロ プ ロ ベ ン	0.02	農 薬
チ ウ ラ ム	0.06	〃
シ マ ジ ン	0.03	〃
チ オ ベ ン カ ル プ	0.2	〃
ベ ン ゼ ン	0.1	有機溶剤
セ レ ン 及 び そ の 化 合 物	0.1	重 金 属

<部局の動き>

平成6年文学部博物館春季公開展示

文学部博物館では、5月28日（土）で平成6年春季公開展示を終了した。

展示内容、入館者数は次のとおりである。

また、本公開展示にあわせ、4月16日から5月21日までの間4回にわたり土曜日の午後公開講座「日本都市図への招待」を開催した。

期 間	展 示 の 名 称	入 館 者 数				
		一 般	学 生	職 員	特別観覧	計
4/12～5/28	三 都 の 古 地 図 —京・江戸・大坂—	1,449	664	253	444	2,810
	聚 楽 第 と 御 土 居 日本古代文化の展開と東アジア					

(特別観覧とは学術研究、視察その他博物館運営研究及び施設見学等である。)

—公開講座—

文学部博物館「日本都市図への招待」

文学部博物館では、平成6年春季公開展示にあわせ4月16日から5月21日までの間、4回にわたり土曜日の午後1時30分から4時まで、同講演室において第14回公開講座「日本都市図への招待」を開催した。

今回も一般市民を対象とした公開講座は、本学教官3名と他大学の教官1名が講師となり、館収蔵の古地図を素材として、近世から現代までを視野に入れ、都市と都市図の展開をたどり、その内

容が理解できるよう紹介したもので70名が受講した。

講義題目、講師は次のとおりであった。

近世三都と都市図 文学部 金田 章裕

聚楽第プランと近世の聚楽第絵図

大学院人間・環境学研究科 足利 健亮

近世都市大坂の成立—寺内町から城下町へ—

園田女子学園大学 仁木 宏

都市問題と都市図 文学部 成田 孝三

(文学部)

<紹介>

医学部附属病院新診療施設棟
における放射線診療

放射線部は、昭和36年2月に各診療科に分散配置していたX線室を中央レントゲン部に集め、放射線診療全般を中央診療棟に統合したことに始まる。現在、放射線部は画像診断部門、放射線治療部門、同位元素部門の3部門に専門分化し、各専門分野別に診療を実施している。

今回、京都大学医学部附属病院施設整備計画の

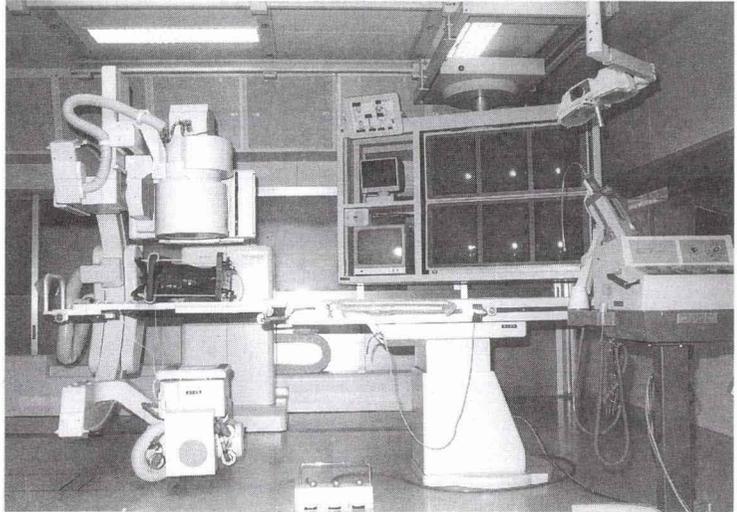
一環として、平成3年1月に新しい中央診療施設棟（新中診施設棟と略）が完成した。新中診施設棟は、地下1階、地上4階で、5階から8階までは外科系臨床研究棟となっている。放射線部は1階と地階に位置し、面積はそれぞれ3,118㎡、1,823㎡で、国立大学附属病院としては、有数の施設規模を誇っている。

1階に位置する画像診断部門は、各種撮影検査室、各診療科共通利用の総合画像診断室、モニターステーション、放射線部インフォメーションセンター、職員居室、学生研修室等からなり、地階は各種放射線治療室、治療計画室、温熱療法

室、化学療法室、診察室、会議室、総合画像診断検索保管システム (PACS: Picture Archiving and Communicating System) データ管理室等からなっている。

1階の一般撮影検査ゾーンは予約を必要としない胸部、腹部、体幹骨等の一般撮影検査が主体で、一部の検査は、従来のX線フィルム以外の検出媒体を用いたCR (Computed Radiography) による画像のデジタル化が進められている。また、この検査ゾーンは入院及び外来患者を対象とするため、多数の患者が短時間に集中するという特殊性をもつ検査ゾーンであり、放射線部X線撮影検査の60%以上がここで実施される。

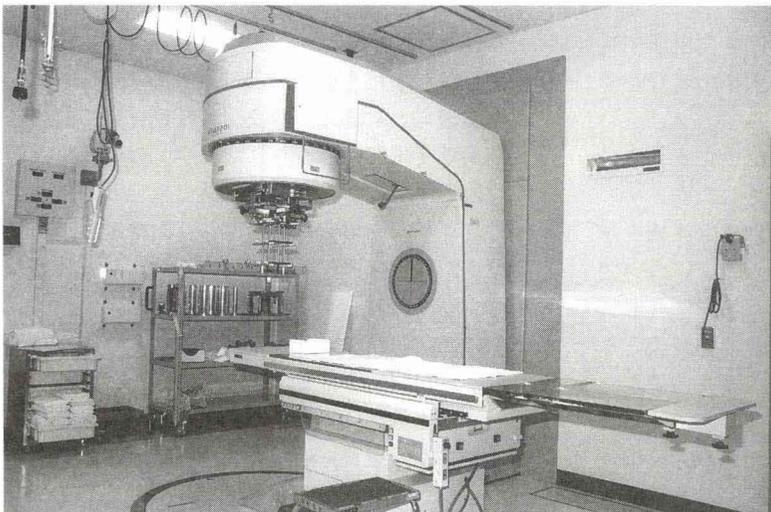
予約検査ゾーンは、全ての検査が予約制で、前処置、看護を必要とするX線透視撮影検査、X線CT (Computed Tomography) 検査、泌尿器・婦人科系検査などが行われる。画像はDR (Digital Radiography), CR, X線CTなどによるデジタル画像が主体で、画像読影はCRT (ブラウン管) が中心であるため、エリアごとに調光式照明を設備し、最適読影環境の確保と医療従事者の目の疲労度を軽減する設計がなされている。また、X線CTに関しては高精度の診断能を目指して、最新鋭装置2台が設置されている。



頭・腹部血管造影検査室

清潔検査ゾーンは、放射線部において唯一観血的検査が行われる分野で、検査の特殊性を考慮し、手術部に準じた空調設備が施されている。

この検査ゾーンでは、心機能の総合的検査を行う心臓カテーテル検査や、特殊なカテーテルを用いた血管拡張術、塞栓術の治療などが実施される他、清潔を要する透視撮影検査 (脊髓腔造影検査など) も可能である。また、新規装置を導入した頭・腹部血管造影検査室では、PACS ワークステーションとのネットワークにより、検査室内外のモニター上で患者の過去画像を観察、確認することができるため、安全で確度の高い診療が可能である。



マイクロトロン治療室

また、CT, MRI (Magnetic Resonance Imaging), CR 等の普及による医用画像のデジタル化と、これらの画像を保管、通信するシステムの構築は、将来の医用画像を用いた放射線診療の1つの方向性を示している。今回、PACS が構築され、放射線部で発生するデジタル画像は、PACS データ管理室の光ディスクに保管、管理される。将来は全診療科の外来、及び病棟にPACS ワークステーションを設置することにより、CRT 画像診断が可能となる。

一方、地階に位置する放射線治療部門は、放射線治療を行うために必要な診療処置を行う分野、放射線治療を具体的に計画する治療計画分野、実際に照射を行う照射室、及びその付帯設備の分野に大別、配置されている。

腫瘍の局在診断と治療方針が確定した後は、透視下、及び CT 画像を用いた治療計画装置 (CT シミュレータ) による各疾患ごとの最適な照射術式が決定される。特に CT シミュレータは、CT 画像ごとに腫瘍域と禁照射域を入力することで、三次元的な線量分布に基づく最適な照射術式が決定される。

実際の放射線治療は、外部照射、密封小線源による組織内照射、腔内照射が主体である。外部照射は、表在性腫瘍が対象となる超軟 X 線・軟 X 線、深在性腫瘍が対象となる高エネルギー X 線 (リニアック、マイクロトロン) や γ 線 (コバルト-60) の治療が可能である他、難治癌を対象とする術中照射や放射線と熱との併用効果を期待する温熱療法、 ^{192}Ir による組織内及び腔内治療、限局した腫瘍に対する電子線治療も可能で、本邦における最も高度な放射線治療施設の一つとなっている。

(医学部附属病院)

計 報

福田 まさし 正 名誉教授

本学名誉教授 福田 正 先生は、5月8日逝去された。享年87。

先生は、昭和6年3月京都帝国大学医学部を卒業、医学部助手、京都帝国大学助教授を歴任、同26年1月京都大学教授に就任され、放射線医学講座を担当、昭和45年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、昭和38年10月から同45年3月まで京都大学教授結核研究所 (昭和43年より京都大学結核胸部疾患研究所と改称) を併任、昭和43年4月1日から同年8月1日まで京都大学医学部附属病院長、京都大学評議員を歴任され、大学の管理運営に貢献された。

京都大学退官後は滋賀県立成人病センター所長を務められ、地域保健行政に寄与された。

先生は放射線医学全般に亘って顕著な業績を挙げられ、特に放射線の生体に対する影響についての研究は特筆すべきものである。さらに、形態的、生化学的研究方法を駆使して放射線障害とその防禦に関する一連の研究を行い、多くの優れた業績を挙げられた。また、昭和23年我が国で最初に胃腸診断への X 線間接撮影の応用を試み、消化管、胆道系の診断法の改良に力を尽くされ、今日の胃集団検診普及への基礎をつくられた。

一方、第27回日本医学放射線学会会長、第11回国際放射線学会副会長、日本医学放射線学会理事、日本放射線影響学会幹事などの要職につかれ、学会の発展に尽力された。また、厚生省医師国家試験審議会委員として医育行政にも尽くされた。

これらの功績により昭和53年勲三等旭日中綬章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部)

高田 三郎 名誉教授

本学名誉教授 高田三郎 先生は、5月12日逝去された。享年91。

先生は、昭和2年京都帝国大学文学部を卒業、広島文理科大学講師、助教授、教授を経て同22年京都大学文学部に創設された哲学・哲学史第六講座 (西洋中世哲学史) の初代担当教官として助教授に就任、同25年2月教授になり同講座を担当された。昭和41年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。

その間昭和28年7月から同31年8月、昭和32年4月から同34年4月までの二度にわたって本学評議員を務め、特に昭和29年8月から同31年8月まで文学部長の重責を果たされ、大学の管理運営に尽力された。

学界においては日本哲学会、関西哲学会、西洋

古典学会の理事、委員の要職を歴任された。特に中世哲学会においては学会設立に指導的役割を果たされ、昭和27年の同学会設立後は常任委員を同56年まで務められ、終始日本における西洋中世哲学研究の発展と後進の育成に努力された。

先生の研究は西洋古代哲学と中世哲学の双方にわたっており、その学風は哲学と哲学史を密着させ西洋哲学の源流における古典的著作を綿密詳細に分析し解明していく点にある。アリストテレス『ニコマコス倫理学』（昭和13年）の訳注は名訳の定評があり、しばしば版を重ね今日に到っている。先生は西洋哲学を根本から理解するためには単なるギリシア哲学の研究だけでは足りず、それが中世を通して現代に到っている長き伝統の中でこれをとらえなければならないことを看破され、中世哲学の重要性を洞察された。中世哲学史の領域での業績は『善そのものの認識—アリストテレスの場合とトマスの場合』『中世哲学史概説』その他多数の論文があるが、最も特筆すべきは先生とその門下生によって昭和35年に着手され現在な

お遂行されているトマス・アキナス『神学大全』全訳（36冊）の刊行事業である。先生の強力な指導力のもとに始められたこの翻訳事業は、その完成のあかつきには我が国哲学界における記念碑的業績となるであろう。

以上にみられる一連の業績により昭和48年勲二等端宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（文学部）

西村 進 文部事務官

文部事務官 西村 進氏は、5月15日逝去された。享年61。

同氏は、昭和39年8月本学工学部に就職され、以後29年の永きにわたり、業務一筋に、多大の貢献をされた。昭和60年には京都大学永年勤続者表彰（20年勤続）を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（工学部）



